# NICU留学記

2009年3月より，神奈川県立こども医療センター新生児科では全国の若手医師を対象とした「新生児医療のための短期有給研修医制度」をスタートさせました．本コーナーでは，この研修に参加した若手医師の奮闘の様子を紹介します．

留学生：川戸　仁
国保旭中央病院→神奈川県立こども医療センター
研修期間：2009年3月26日～2009年6月26日

## 第1回：想像以上の短期研修の始まり

私は卒後9年目で，小児科医として7年目，新生児科医として3年目になります．これまで自施設以外のNICUでの勤務経験がなく，外科的治療を必要とする心疾患や外科疾患は他施設に搬送しており，その後の診療のイメージがわきませんでした．また，これまで自分が行ってきた診療が最善のものであったか？と疑問を感じることもあり，他施設での診療を経験して自施設での診療を見つめ直す機会を求めていました．しかし，人手不足の現状を考慮すると，長期間の研修は他のスタッフに大きな負担をかけるため，実現困難かとあきらめかけていました．そんなときに，2007年度の未熟児新生児学会教育セミナーで一緒であった福島県の同世代の先生が，2008年の春に神奈川県立こども医療センターで短期研修されたという経験を聞き，非常に共感し，応募しました．

研修初日の3月26日は雪がちらつく春とは思えないくらい寒い日で，病院までの道のり「横浜名物の急な上り坂」が出迎えてくれました．研修当初は，施設規模の違いから，緊急入院以外にほぼ毎日胎児診断のついた児が入院し，ベッドが回転してゆく光景に圧倒され，慣れるのに苦労しました．臍帯血採取，出生児の胎盤供覧など研修開始2週間で多々経験させていただき，これらを他スタッフが行ってくれているという自施設の診療環境にあらためて感謝する場面もありました．4月より全国各地（北海道・青森・山形・愛知・熊本）から赴任された新しい5人のレジデントの先生方の研修がスタートしましたが，治療マニュアルを読んだだけでは気付けないような日常診療の施設間差異の現状を語り合えたことは大きな収穫でした．他施設に搬送していた児の診療を通して，搬送前・搬送中にどのような診療を行うことで搬送後の診療がより良く移行するか？などを考えるようになりました．また，診療の合間に豊島勝昭先生と市民シンポジウムなどの「NICUの実情」を知ってもらう活動に参加させていただき，「目の前の患者さんの診療」だけでなく「よりよいNICU医療とは何か？」を考える機会があったりと，忙しいけれど充実した日々でした．

●留学記録　志高く全国から神奈川に集結した同世代の新生児科医の存在は，私（左から3人目）にとって刺激的でした．